

高校現場からの大学「英語」入試改善のための緊急提案 －「大学入試・卒業要件に TOEFL 等」などを導入する案をうけて－

英語教育が批判を招いているのは、改善がみられない一部の大学入試がもたらす負の波及効果が一因である。平成 25 年度版学習指導要領に則り、4 技能のバランスのよい英語力を目指し、「定期試験には和訳は出ない」と宣言し、高校英語授業改革を進めている教員は多い。一方で、国公立大学個別試験が和訳読解偏重であるため、訳依存を変えられない教員も少なくない。ディベートまで可能な 3 年次には、「ディベートは時間の無駄！入試に必要な和訳を教えて」という声が出て、軌道修正を迫られる。大学入試・卒業要件に TOEFL 等を利用すべきとの声が出たのを機会に、「言語テストの進化」と「授業と評価の一体化」の観点から、大学入試を考え直すべきである。

平成 23 年 6 月、文部科学省による『国際共通語としての英語力向上のための 5 つの提言』では、学習指導要領に準拠し、スピーキングを含め 4 技能をバランスよく問うよう入試改善を提案している。そして、平成 25 年の政府の教育再生実行会議第 4 次提言では、センター試験に代えて「達成度テスト（発展レベル）」の導入、個別試験は知識偏重にならないようにと改善を求めている。具体的には「それぞれの大学の創意工夫により、能力・意欲・適性を多面的・総合的に評価・判定する」とし、面接・論文なども取り入れるべきとしている。学習指導要領で学ぶ生徒が成果を活かせる入試改革への考え方を、高校現場から明らかにし、平成 26 年度までに各大学に自主的に実行していただきたい提案を行う。

1 現状分析

「生き方が見えてくる高校英語授業改革プロジェクト（ECRP）」がまとめているように、最近の入試問題は、次の東京大学の例のように、コミュニケーション志向が増加している。

<http://www.ecrproject.com/>

例：東京大学

- 1 a) 要約 370 語を 70-80 語の日本語で要約 b) 句を本文の空欄へ入れる
- 2 写真利用の課題自由作文と意見表明
- 3 リスニング a) b) c) 議論の場面
- 4 a) 日本語を与えず文脈内で並べ替え b) 指示語の内容がわかるように和訳 説明
- 5 冠詞の用法 穴埋め パラフレーズ 和訳

東大は、リスニングを取り入れ、概要、段落構成や論旨の流れを考えさせる、自分の意見を英語で書かせる、基本文法力を試す、細部理解を問う、多様な表現力を要求し、和訳は最小限にしている。ECRP では、コミュニケーション志向な授業に合致する問題タイプを次のように分類している：大分量の文章に関する英語による内容理解や概要質問・英語による問題指示・聴き/読んだ情報をもとに判断や推論をさせる・パラグラフ構造の理解を試す・会話方略を試す・英語を駆使してタスクを解かせる・自分の考えを段落レベルのまとまった英文に書かせる。これらの作問術は、TOEFL と同質のもので、授業に取り込むと、学習指導要領に則った「英語で行う」授業となり、授業と評価の一体化となる。

しかし、このような入試はまだ少数派で、次の問題点が個別入試問題にみられる。

- 1 各大学の独自性と特色を尊重し、傾向に著しい差がある（進路変更を狭める）
- 2 リーディングに偏り and 和訳を要求することが多い（和訳依存・直読直解軽視）
- 3 文法と語彙問題には、標準的使用とはかけ離れているにもかかわらず長年使用されてきたという理由で繰り返されるものがある（不必要な学習）

3-5行の下線部和訳を数カ所と5行の英訳2問からなる例もある。これは言語テストというより、2言語間の変換と構造分析で頭のよさを見るテストであり、「和訳で理解する」という文言がない学習指導要領からの逸脱でもある。また、TOEFLライティング採点では明確なルーブリックが使用されるのに対して、基準が明らかでない。このような出題が、世界的評価の高い大学の入試で見られるため、冒頭で述べた悪い波及効果が甚大である。

2 語学テストの進化

TOEIC、TOEFL等の語学テストは進化してきている。その方向は、「4技能を測る」、「自国の言語を使わない」、「文法単独問題の出題はない」、である。TOEFL iBTでは、コンピュータを利用し、キーボード入力と音声吹き込みをする。日本でも、4技能型の英語の入試試験 TEAP(Test of English for Academic Purposes)「アカデミック能力判定試験」が上智大学と日本英語検定協会により同じ方向性で開発されている。また、現行の英語能力を測る試験もコンピュータを利用しライティングとスピーキングを含めた4技能型への移行を図ろうとしている。

3 大学入試改善のための提案

高等学校から見ての改善の方向性を示し、実現可能な順に提案をまとめる。

3.1 センター試験について

【方向性】教育再生実行会議第4次提言での到達度テスト(発展レベル)を支持する。スピーキングを含めた4技能対応コンピュータ受験の環境を整え、複数回受けることができるようにする。習熟度を段階で判断できるようにし、大学入学までに到達するレベルを設定し、資格テストとする。そのための予算を計上し、学会の協力を求め、最新の科学的見知を取り入れる(LET、JACET、JASELEによる通称「京都アピール」参照 <http://www.jasele.jp/2013/09/17/kyoto-appeal-2013/>)。

【提案】1) 到達度テスト実施までは、現行センター試験のリスニングの配点を多くする。
2) 4技能対応の英検、TEAP、TOEFL JUNIORなどを上記試験と同等の資格とする。

3.2 大学個別試験について

【方向性】個別試験は、コミュニケーション型な授業に合致するタイプで、できるだけ4技能をバランスよく測定するものとし、素材の内容や難易度で各大学の個性を活かす。政府の決定を待つのではなく、平成26年度6月までに新たな入試の方向性を公にし、平成25年学習指導要領で学んだ生徒が受ける平成27年度の入試を改善する。

【提案】1) 和訳・英作偏重でなく、作問意図が学習指導要領に則っている。
2) 大学入学後や卒業後での英語学習の成果が TOEIC や TOEFL で測定されることが多いことを踏まえて、それらのテストとの親和性も考慮する。

TOEFLを参考にしたリーディング・ライティング統合型の出題例：次の英文を読んで、書き手の主張を英語で70語程度にまとめ、それに対する自分の意見を、賛成・反対を明確にして70語程度の英語で述べよ。

技術的な困難も予想されるが、平成25年度版指導要領でのコミュニケーション型な授業への大きな波及効果がある。日本で英語を学習する高校生に達成感を与え、真の国際性を備えた人材育成を実現させるために、入試改善を行っていただくことを希望するしだいである。

大阪府高等学校英語教育研究会研究部会有志
代表溝畑 保之 z-mizohata@ohtori.osaka-c.ed.jp